

昭和の水師營

東條英機とマッカーサーの会見

名越二荒之助

日本人にとって、昭和20年9月27日という日は忘れられない日である。この日天皇陛下は、はじめてマッカーサーを訪問せられた。日本の元首であられる陛下が、アメリカの一軍司令官に過ぎないマッカーサーを訪問されることは、国際慣例からもあり得ないことであり、敗戦日本の悲劇を象徴するものであった。終戦時、トルーマン大統領に明治天皇のような博愛の心があり、マッカーサーに乃木将軍のような武士道精神があったら、9月27日は、東條英機とマッカーサーの間に、次のような「昭和の水師營の会見」が行なわれたであろう。したがって極東裁判も行なわれず、米製憲法の押しつけもなかったはずである。

敵味方を超えたヒューマニズム

戦争とは何でしょうか。その定義はいろいろありますが、最も客観的に見れば、国家間の正義の主張が総力をあげて激突するものであることは確かでありましょう。そのため戦争となれば、国家は総力をあげて取り組み、国民は尊い生命を国に捧げます。戦争の渦中にいる時には敵愾心を燃やし、「鬼畜米英」とか、「モンキー・ジャップ」とか、「チャンコロ」「東洋鬼」の悪罵を投げかけて、戦意を昂揚します。しかし戦が終われば、死力を尽くした者同士の間にも共感が生れ「昨日の敵は今日の友」として、その勇戦を讃えあうものです。

かつてインパールの攻防をめぐる、日本軍と死闘した英国軍人が、戦後日本を訪れ、かつての日本軍人と旧交をあたためたり、硫黄島で戦った日・米軍人が靖国神社で会ったり、ほほえましい話は、時々新聞で紹介されてきました。

顕著な例をあげれば、イギリスの首相であったチャーチルは、その著「第二次大戦回顧録」(ノーベル文学賞)の中で、ディゴ・スワレズ軍港(マダガスカル島の北端)を奇襲した日本軍人の忠勇武烈ぶりを讃えています。またオーストラリアは、シドニー軍港を奇襲した日本軍人の遺体を引きあげ、「愛国心は日本だけの独占物ではない」として、海軍葬の礼をもって弔いました。さらにフィリピンのマルコス大統領はルバング島で30年間戦った小野田少尉を、武士の礼をもって遇し、戦死した小塚一等兵を陸軍栄誉礼をもって弔いました。

このような敵を愛する武士道精神は、日清・日露戦争当時にも、彼我双方の間に沢山生れました。有名なのは「水師營の会見」です。

「水師營の会見」というのは、明治37年8月から、約5ヶ月にわたって、日露の間に

旅順要塞の攻防をめぐる死闘が演ぜられた後に起った、感動の名場面なのです。戦後の教科書には、旅順の戦は出ていても、「君死に給ふことなかれ」の与謝野晶子が主役のように記述されていて、旅順を陥落させた乃木希典も、水師營の会見も出てきません。戦前の日本では、敵の将軍ステッセルと乃木希典との間に交わされた、友情あふれる会見の模様を知らない者はいませんでした。この会見の物語は、日露戦争後佐々木信綱によって作詞され（作曲は岡野貞一）、文部省唱歌として教科書にのり、誰もが愛唱していました。

この歴史に残る感動の物語が、どうして現出したのか。その発端を作られたのは、明治天皇でした。旅順陥落が決定的になった時、天皇は敵将ステッセルに対し、武士の名誉を保持させるように希望せられました。陛下の御意志を体した山県有朋参謀総長は、乃木司令官に対して、次のような電報を送りました。

「 敵将ステッセルヨリ開城ノ提議ヲ為シタル趣伏奏セシ所

陛下ニハ将官ステッセルガ、祖国ノ為ニ^{よみ}尽シタル勲功ヲ嘉シ賜ヒ、

武士ノ名誉ヲ保持セシムル事ヲ望マセラル

右謹デ伝達ス

明治38年1月1日

参謀総長 侯爵 山県有朋 」

誠忠無比な乃木将軍は、電報を謹んで受け、明治天皇の御意志をステッセルに伝え、感動的な水師營の会見となったのでした。

終戦後日本に進駐したダグラス・マッカーサーは、かねてから乃木将軍を尊敬していました（現在乃木邸にはマッカーサーの献木したアメリカ・ハナミズキが秋になると赤い実をつける）。昭和20年9月27日、天皇陛下とマ元帥の最初の会見が行なわれましたが、その時にも、マッカーサーは陛下の御下問に対して、次のように答えています。

「私ト東洋トノ関係ハモウ40年ニナリマス。最初ハ1905年日露戦争当時デ、父ガ大山元帥ノ下ニ従軍シ、私ハ父ノ副官トシテ参リマシタ。ソノ関係デ大山元帥、乃木大将、黒木大将等数々ノ日本ノ偉大ナル人物ヲ知ッテ居リマス」（当時通訳にあたった奥村氏の記録）

当時マッカーサーは、水師營の会見の物語を知っていたでしょうか。もし日本敗戦の直後、アメリカの元首であったトルーマン大統領が、明治天皇のような敵をも愛する博愛の心を持ってマッカーサー司令官に対し、「日本の戦争指導者たちが祖国のために尽くした勲功を讃え、武士の名誉を保持することを望む」と訓令を発していたら、どうなっていたでしょうか。

これから本稿で展開する会見記は、明治天皇と乃木将軍の心が、トルーマンとマッカーサーの中に生きていた場合を想定した架空の物語です。明治の時代と、日・米戦争と、戦後日本を比較して考える一方法として、読んでほしいと思います。

会見場は旧乃木邸

この物語は、トルーマンがルーズベルトをしのぐスケールを持ち明治天皇のように敵の立場にも暖かい配慮を払う人物であることから始まります。

トルーマンは急死したルーズベルトのあとを受けて、突如大統領に就任（1945年）しました。彼は副大統領の頃から、ル大統領の強引な謀略的外交戦略に反発を感じていました。そもそもアメリカと日本が、全面的に戦争するようになった動機は、ルーズベルトが巧妙に日本を圧迫し続け、先に手を出させるように仕向けた、陰謀的な外交にありました。追いつめられた日本は、それを見破る余裕もなく、真珠湾を奇襲しました。それによってルーズベルトは、イギリスを助け、ドイツを叩くという本来の目的に成功したのです。そのことを側近にいて知り尽くしているトルーマンは考えました。

「こういうル外交の謀略は、やがて頭のよい日本人に見破られるに決まっている。その時日本人は、米国に憎しみを持つようになるであろう。これからアメリカと日本が復讐感情から解放され、安定した関係を維持するためには、相互の間に信頼感をとり戻さねばならない」

そう思ったトルーマン大統領は、マッカーサー司令官に対して、日本の指導者に武士の名誉を保持するよう、訓令を発したのです。

マッカーサーは訓令を受けた時は驚きながらも、すぐトルーマンの深慮を理解しました。

「米・日の軍人は、相互に死力を尽して戦ったが、軍人には罪はなかった。軍人はそれぞれ皆自己の祖国に殉じようとしたのである。その忠誠の精神は、戦争が終れば互いに讃えあうべきものである。また相互の戦争指導者も自国の正義を主張して戦ったのである。日本には日本の正義があった。米国は日本の正義を認め、日本は米国の立場を理解しあうことによって、米・日は恒久の信頼を回復できる」

「米・日が信頼関係に結ばれることは、太平洋の平和のみならず、世界の平和に寄与することができる。ポツダム宣言の十項には『吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪者の処罰』を謳っている。これは俘虜虐待に関係する者の処罰であって、指導者や、日本の戦争そのものを裁くものではない」

というのが、マッカーサーの判断でした。その時彼は、乃木とステッセルが会見した水師営を思い出しました。

「自分もその故事にならって、水師営の会見を再現してみよう。敵将・東條英機以下日本の指導者たちを招いて、武士の礼を尽してみたい。水師営の会見は、いわば旅順戦という局地戦を戦った者同士の会見であった。しかしこの『東京の会見』は、太平洋戦争と大東亜戦争という全体戦を戦った者同士の会見といえる。会見の内容いかんによっては、戦後の世界を安定させる基礎になるのではないか」

彼の夢は次々にひろがりました。

それでは会見場をどこにするか。アメリカ大使館やGHQ本部にすれば、敗者を呼びつけることになります。彼はいくつかの候補の中から、今も赤坂に昔のままに残されている旧乃木邸を、会見場に決めました。

マッカーサーと東條英機の会見が行なわれることを嗅ぎつけた各国のニュース・カメラ

マンたちは、競って世紀の会見の様態を撮影しようと司令部に許可を求めました。しかしマッカーサーはそれを断りました。それは乃木の故事を思い出したからです。

乃木将軍は当時、アメリカの映画技師が、劇的な会見の様態を記録映画に納めようとして撮影許可を願い出た時、断っております。敗軍の将ステッセルにとって、屈辱の場態が残ることは耐えられないだろうという配慮からでした。しかし各国の特派員からは是非ともという要望が出て、乃木は断りきれず、「会見が終了すれば、敵も味方もなくなる。全員軍人として同列に揃ったものなら一枚だけ許可しよう」として撮影を認めました。それが現在も残っている一葉です。(写真参照)

東條英機^の遺書

東條英機は終戦後、身の処し方について、熟考を重ね、心は千々に乱れていました。一方では大東亜戦争を開戦し大敗北に追い込んだことに対して、全責任を感じていました。

きんおうむけつ
金匱無欠の栄光の歴史に一大汚点を残した罪は、八裂きにされても足りない気持ちでした。

たとえ身は 千々にさくとも およばじな
栄へし御代を 落せし罪は

彼は稚拙ながら、当時の心境を和歌に託しました。しかし一方では、日本が戦った大東亜戦争の大義だけは、歴史に刻印しておきたいと思ひました。そのため「英米諸国人二告グ」(四百字)、「日本同胞国民諸君」(四百八十字)、「日本青年諸君二告グ」(四百字)の3通の公的遺書を作り、徳富蘇峰に添削を頼み、机の中にしまい込みました。その中には、

「大東亜戦争八彼ヨリ挑発セラレタルモノニシテ、我ハ国家生存、国民自衛ノ為、已ムヲ得ズ起チタルノミ。コノ経緯ハ昭和16年12月8日宣戦ノ大詔ニ

特筆大書セラレ、炳乎トシテ天日ノ如シ。故ニ若シ世界ノ公論ガ、戦争責任者ヲ追求セント欲セバ、其ノ責任者ハ我ニ在ラズシテ彼ニ在リ、乃チ彼国人中ニモ亦往々斯ク明言スルモノアリ。不幸我ハ力足ラズシテ彼ニ諭シタルモ、正理公議ハ儼トシテ我ニ存シ、動カス可カラズ。

カノ強弱ハ決シテ正邪善悪ノ標準トナス可キモノニアラズ。人多ケレバ天ニ勝ツ。天定レバ人ヲ破ル。是レ天道ノ常則タリ。諸君須ラク大国民ノ襟度ヲ以テ、天定ル日ヲ待タレンコトヲ。日本ハ神国ナリ。永久不滅ノ国家ナリ。皇祖皇宗ノ神靈ハ畏クモ照鑑ヲ垂レ玉フ」(「日本同胞国民諸君」より)

の文章が見えます。

彼は学者ではなく、資料の裏づけをもった長論文をものすことは不得手です。短文の中に民族への祈りをこめて簡潔に要約しました。彼が遺書の中で一貫して述べたことは、次の三点に尽きましよう。

- ① 大東亜戦争は宣戦の大詔に述べてあるように、国家の生存をかけた自衛の戦争であり、挑発の責任は米英にあった。
- ② 米英は力では勝ったが、天地を貫く正理公道は日本にこそあった。天運定まれば、必ず

やそのことが明らかになるであろう。

- ③ 日本は永遠不滅の国である。一時の敗戦で自暴自棄におちいることなく、精進努力すれば、祖先以来の神々も照覧せられるであろう。

敗戦直後、責任を感じた諸将は、次々に自決してゆきました。陸軍大将・阿南惟幾は8月14日夜、介錯なしで割腹自刃。田中静彦大将は徹底抗戦の青年将校の決起を鎮圧し、8月24日夜、司令官室で拳銃自決。さらに悲壮であったのは、国体護持を念じて、民間人が集団自決していったことでした。8月22日には、尊攘義軍12士女が、愛宕山頂で手榴弾によって集団自決。翌23日には、明朗会員12名が、宮城前左隅提でそれぞれ自決。25日には、大東塾14名が代々木練兵場の一隅で、全員割腹自刃――。

彼もそれに続くことは当然であり、何回かその誘惑にかられました。しかし戦争全体の責任を自認する者として、祖国の前途に対し、別の思惑を秘めていました。国体護持を唯一の条件としてポツダム宣言を受諾した日本です。その行方を確認し、そのためにこそ一命を捧げるべきではないかと、心に深く期するものがありました。彼は敗戦後取材に訪れた連合側記者に対して、「私も軍人としてのマッカーサーを尊敬している。もう彼らに憎しみなど抱いていない。戦が終われば敵も味方もない。昨日の敵は今日の友だよ」と気さくに話していました。戦が終われば、敵も味方もなく、それぞれの勇戦を讃え、認め合うのが武士道精神だ、というのが彼の信条でした。そしてこの信条はヤンキー気質にも通ずるのではないかと、そしてできたら敵将、マッカーサーにも一度会って、彼の本音を叩いておきたい、という狙いも込められていました。

昭和の「水師堂の会見」

9月11日（実際は東條が逮捕された日）のことでした。突然マッカーサーから東條に対し、会見申し込みの文書が届きました。それには、

「トルーマン大統領の訓令により、貴下ら大東亜戦争の指導者7人を招き、その勇戦に敬意を表したい。軍人として帯剣着用可。日時は1945年9月27日、午前10時。場所は赤坂区赤坂・旧乃木邸」

とありました。東條はこの簡単な案内状を読んで、連合側記者に語った秋波が、マッカーサーに通じたと思いました。「さすが敵を知り己を知るマッカーサー将軍である」と、親しみさえ感じました。

彼は早速他の6人にも連絡をとりました。6人の中には、この会見の背後に何か別のたくらみがあるのではないかと、半信半疑を口にする者、屈辱を言う者もありましたが、東條の説得に従って、揃って出かけることにしました。

東條は会見までの2週間、マッカーサーに何を訴えるか、構想を練りました。

いよいよ約束の9月27日・午前10時。東條ら7人は揃って旧乃木邸に到着しました。

その時乃木邸の門には、両側に日章旗と星条旗が交叉して掲げられていました。

周辺には、旧指導者がどんな顔をして出かけるか、一目見ようとして群衆がとり囲みまわりました。揃って階級章をつけ、帯剣を帯びた7人が近づいてくると、群衆の間から、「おめおめと捕虜になりに行くのか」

「命乞いじゃないのか」

「早く切腹せい。今さら会見でもあるまい」

などの蔑視する声があがりました。

彼ら7人は、悪罵の中、表情を変えることもなく、門をくぐりました。

邸内に入れば、玄関前に水師營から移したなつめの樹がすぐ目に入ります。また右側の平屋建ての中には、ステッセルから贈られたアラビヤ産の名馬（寿号）の厩舎きゅうしやが、今も残されています。

長い戦争が続いて、この地を訪れることもなかった彼らは、しばたたずんで複雑な感慨にひたっていました。

その時彼らは、一段さがった所に広がっている10坪ばかりの菜園に、目を移しました。そこは乃木将軍が茄子などを栽培していた家庭菜園です。その菜園に、いま米軍の軍楽隊が勢揃いしています。軍楽隊の指揮者が7人に黙礼しました。彼らは何を演奏するのか、7人はすぐには気がつきませんでした。

その時、正式の軍装を着用したマッカーサーが姿を現しました。お互に写真で確認していたものの、日米双方の指導者が、はじめて顔をあわせたのです。日本の指導者の表情は一瞬こわばりましたが、マッカーサーは顔をほころばせながら、近づいてきました。

「私の唐突な提唱を、皆さん快く理解し、出席して頂き感謝いたします」

東條は皆を代表して、答えました。

「恩讐を超えて、私たちにこのような機会を与えてくださった閣下に対し、私の方こそ感謝いたします」

マッカーサーは大きな手をさし出し、一人一人に握手しました。それにあわせるように軍楽隊の演奏が始まりました。曲目は「水師營の会見」です。

- 1、 旅順開城約成りて
敵の将軍ステッセル
乃木大将と会見の
所はいずこ 水師營
- 2、 庭に一本ひとつなつめの木
弾丸あともいちじるく
くずれ残れる民屋みんおくに
今ぞ相見る 二将軍

メロディが流れる中を、マッカーサーの先導で7人は会見室に進みました。会見室は狭いながら、乃木夫妻が自刃した隣室に用意されていました。日・米双方は、机をはさんで対座しました。メロディは流れています。

- 3、 乃木大将はおごそかに

御めぐみ深き大君の
大みことのり伝うれば
彼かしこみて 謝しまつる

双方が着座し終ると、マッカーサーはたちあがりました。彼はまずトルーマンから届いた電文を、厳かに読み上げました。電文には前にも書いたように、日本民族が大東亜戦争を壮烈無比に戦った勇戦を讃え、その指導者たちに対し、武士の礼をもって遇せよ、という趣旨が盛り込まれています。読み終わると、マッカーサーはそれを7人の方に示して、次のようにコメントしました。

敵将を武士の礼で招く

「わが国のトルーマン大統領は、真に世界の安定を希望しています。そのためには相互に増悪心を取り除き、これから信頼に結ばれた日米関係を築きあげてゆかねばなりません。世界の歴史から、戦争の悪循環を除去するにはどうしたらよいか。知恵を貸してほしいと思います」

東條ら7人は、予想していたこととは言え、最初耳を疑いました。マッカーサーの言葉は、本心から出たものであろうか。しかし水師營の会見にあやかっただけで、トルーマンの言葉といい、それらは事実であります。東條は7人を代表して起ちあがりました。

「本日は思いもかけず、我々“敵将”を武士の礼をもってお招き頂、恐縮汗顔いたしております。そのうえ唯今は、大統領閣下から格調高いお言葉を拝聴して、私たちは言葉もありません。ただかしこむのみであります」

東條の言葉は漢語調であり、日本人的用語の羅列であるために、ニュアンスをどれだけ伝えることができたか、通訳が困ることは知りながらも、彼としてはこのような表現しかできませんでした。彼は続けました。

「省みればわが日本は、開戦と同時に真珠湾を奇襲し、フィリピン、香港、マレー半島に対して上陸作戦を敢行しました。緒戦において連合軍は大打撃を受けられたにもかかわらず、戦線をたて直し、不敵のアメリカ魂もって優秀な技術能力と生産力を駆使し、終にわが国に勝利せられました。その見事な勝ちっぷりに心から敬意を表します。それに対して私たちは、戦争指導よろしきを得ず、惨敗いたしました。敗者として残念であり、恥ずかしく思っております。にも拘わらず閣下は戦勝におごることなく、敗残の将をこのように騎士道の精神をもって遇され、まったく感服いたしました。私たちは閣下の御指示により、このように帯剣を着用して参上いたしました。敗軍の将は敗軍の将らしく、閣下に剣を奉呈いたします」

東條が挨拶を終えて剣を差出すと、7人は次々に渡してゆきました。マッカーサーは一応受け取ると、再び彼らに返しました。

「私は幸運にも勝者となりましたが、戦いの勝敗は武士の習いでであって、勝者が優れ、敗者が劣るというものでは、決してありません。それよりも貴下らはよくぞ戦われました。

太平洋の島々では玉砕するまで戦い、特攻隊を繰り出し、一億総戦死まで誓った壮絶さは、史上例を見ないものと言えましょう。それはあたかもギリシャ悲劇を見るようだと評した者もありましたが、私はそれ以上であったと思っています。一億の国民をここまで引きつけた貴下らの人徳、貴下らの指導力はまた、世界の戦史に輝くものと思います」

両特の語る天皇親・国体親

マッカーサーの言葉を聞いて、東條はさえぎりました。

「ちょっと待って頂きたい。国民をあそこまで団結させた力は、決して私たちにあるものではありません。我々の見通しの劣かさ、戦略戦術の拙劣さは国民に対してあわす顔がなく、まさに慙死に値します。日本国民をあのように団結させた力は、ただ上御一人の御稜威のいたす所であります。三千年におよぶ日本の歴史に断絶がなく、万世一系の御皇室を頂き、義は君臣、情は父子という歴史の精華が、祖国の危機に臨んで国民の心に復活したこと、それが日本人をあのように戦わした精神的原動力でありました。我々の力では決してなかったことを、まず御理解頂きたいと思います。

ポツダム宣言を受諾する時、わが国が最もためらった点は“国体護持”でありました。果たして受諾して日本の国体が護持できるかどうか。国体とは、どこの国にもある民族精神の根幹であります。閣下の祖国アメリカにも国体があります。貴国では歴代一貫してデモクラシーに基づく大統領体制を護持してこられました。もし貴国が、日本のように最後の関頭に立ち至られたならば、必ずや貴国もアメリカ国体の護持を、ギリギリの条件として出されるに違いありません。私たちがこうして恥をしのんで参上いたしましたのも、この一点について閣下から確認しておきたかったからであります」

マッカーサーは、双方の挨拶が終った所でコーヒー・ブレイクにするよう指示していました。しかし緊張した雰囲気が続いて、その機会もなく、マッカーサーはパイプに火をつけることも忘れて、言葉を続けました。

「私には貴下の言われることが、よく判るような気がします。しかし日本の天皇は、戦争遂行面に偉大な力を発揮されただけではありません。あれほど戦った日本民族であったが、一度天皇の詔勅ひとたびが出れば（戦う余力があるにも拘わらず）、いっせいに終戦してしまっただ。天皇は戦争の遂行において偉大な力を発揮せられたが、戦争の收拾にあたっても見事な権威を示された。天皇は、戦争においても、平和においても、中心的存在であられる。そのことが、日本に進駐してきて、はっきり判りました。他国では想像もできない和戦両面に及ぶ秩序能力が、日本にだけなぜあるのか。これを日本人から教えて貰いたいと思います」

「そのことは我々日本人にとってあたりまえのことであって、理論的に説明できることではありません。ただ言えることは、日本は“開戦”においても、“終戦”においても、天皇と共にあった。いや、天皇は“戦争”とか“平和”とかいう次元で理解するものではありません。日本はそもそも“君主”とか、“民主”とかいう政体ではなくて、“君民共治”の国であり、天皇は不思議な精神的原点というよりほかないのです」

「私は東京に進駐してきて、この不思議な日本の原点について、何人かの人に聞いてみました。日本人の説明ではよく判らないので、実は自分自身でも勉強しています。まだまだとても判った訳ではありませんが、先日日本の建国の父・初代神武天皇が、国家統一された経過を書いた本（古事記・日本書紀）を、翻訳させました。この本を読まなければ、日本は判らないと思ったのです。経過をたどってみると、天皇はいわゆる“覇者”とは違うことが判りました。印象に残った言葉をあげれば、“祖先の徳にこたえる”とか、“民と共によろこびを重ねる”とか、“民の利益を優先させれば、自然に国は治まり、聖者の道にかなってくる”とか、含蓄ある政治哲学が盛られていました。それに世界政策には、世界を一つの家族のようにしてゆこうという理想が、示されています。私はこの本を読んで、天皇朝がずっと続いている秘密に触れたような気がしました」

敵将からここまで踏み込んで理解されては、東條も返す言葉がなく、平伏せんばかりに答えました。

「閣下は我々日本人以上に、日本の本質を掴もうとしておられます。それに対して我々のアメリカ研究は、まことに皮相であって、ここで申しあげるほどの持ちあわせがなく、恥じ入ります。しかし今閣下が、日本の精神伝統に対して、深い理解をもたれていることを知り、ここまでまかり出た甲斐がありました。ありがとうございました」

ここまで述べた時、東條は油汗をかいて額が赤く光っていました。彼は続けました。

「さてここで閣下の御指摘に対し具体例を補足させて頂きたいと思います。閣下は今思いもかけず、神武建国の理想である八紘一宇に触れられました。八紘一宇とは、すべての国にその所を得しめる点にありました。我国は大戦中、ビルマやフィリピンに独立を与えました。その精神は、それぞれの国の歴史伝統と独立心を回復せしめる点にありました。基本法（憲法ではない）も作るよう指導しましたが、日本製のものを押しつけるのではなく、彼ら独立運動家に作らせました。本格的な憲法については、大戦下の特殊事情を考慮し、大東亜戦争終了後1年以内に憲法制定委員会を作って、すべての事項を決定することにしました」

マッカーサーは深く首肯いて、話題を転じました。

敵将による戦争目的への理解

「私は壮烈な日本民族の戦いぶりを見ながら、何度か思いました。日本人をここまでかりたてたものは何であったのか。それは貴下の言われる日本の国体であろう。しかし日本人が国体を何ものにも代え難いものと意識し始めたのはむしろ戦争の末期からではなかったか。戦争の初期において、日本人のエネルギーがあれだけ爆発したのはなぜか。帝国主義侵略の快味を満足させる英雄主義的動機というようなものではない。やはりあの初期の爆発は、数百年にわたってアジアを侵略した欧米勢力の野望粉碎という、大きな使命感があったのではないか。

考えてみれば欧米諸国は過去数百年にわたって、アフリカから東南アジア、そして支那大陸に至るまで、植民地化してそれぞれの民族の魂を奪ってきた。この点についてはいつ

か歴史の審判を受ける時が来ると思っていたが、死力をつくした日本民族の戦いによって、強く気づかせられた。日本民族数百万の死は決して無駄ではなかった。アジア・アフリカ諸国は、これから次々に独立してゆくであろう。欧米諸国が巻き返しに出ても再びこれらの地域を植民地にすることは決してできない。歴史の大河はもう動きはじめている」

東條をはじめ7人は、これが敵将の言葉かと、再び息をのみました。戦争という熱狂の時代が終ると、このようにさめた目で日本の本質と戦争を見直すことができる武人は、これまで居なかったのではないか。東條をはじめ7人は、戦争のみならず、国家の格においても、圧倒されつつあることを、感じました。心を励まして東條は立ちあがりました。

ワシントンの「訣別の辞」

「自国の立場と歴史を超越して語られる閣下の言葉を聞きながら、私は思い起しました。わが国が緒戦で勝利を続けている時、大東亜戦争の収拾策を考えたことがあります。当時日本の将軍の中には、(戦意昂揚を狙ったものと思いますが)“ワシントン・ロンドンで城下の誓いをさせる”などと、景気のよいことを言っていました。あの当時の国力からして夢のような話でしたが、しかし実際に日本が勝利し、貴国の首都を占領したような場合、貴国をどのように処理するのか。指導者を戦犯裁判にかけたり、アメリカ全土を植民地にしたりすることなどではしません。万邦に各々その所を得しめる八紘一宇の精神から、どうすべきか。私は考えました。やはりアメリカは建国の精神に立ちかえるべきではないか。そう思って私は貴国の建国の偉人・ワシントン大統領の言行を勉強しました。貴国の父祖・ワシントンは、『訣別の辞』の中で、次のように述べております」

東條はそう言って、胸ポケットからぶ厚い手帳をとり出し、書きとめていたワシントンの言葉を読みました。

「国家政策を実施するにあたって、もっとも大切なことは、ある特定の国々に対して永久的な根深い反感を抱き、他の国々に対しては熱烈な愛着を感じるようなことがあってはならないということである。そして、そのかわりにすべての国に対して公正かつ友好的な感情を持つことが、何よりも重要である。他国に対して、常習的に好悪の感情を抱く国は、多少なりともすでにその相手国の奴隷となっているのである。

国家間の平和は、この好悪の感情の犠牲となって失われることが、しばしある。好意をいなく国に対して同情を持つことによって実際には、自国とその相手国との間には、なんら共通利益が存在しないのに、あたかも存在するように考えがちとなる。一方、他の国に対しては、増悪の感情を深め、そこにはじゅうぶんな動機も正当性もないのに、自国をかりたてて、常日頃から敵意を抱いている国との闘争にさそいこむことになる」

マッカーサーは、父祖・ワシントンの言葉を引用しながら語る、東條のしたたかさに驚きました。それとともに、ワシントンが示したアメリカの政治家への遺言とも思える指摘の鋭さに、愕然としました。

目光の感情で真の敵を見失う

「ワシントンの訣別の辞は、何度か読んだことがあります。このようにつきつけられてみると、言葉ありません。この文章は第二次大戦そのものの批判になっています。ルーズベルトは、イギリスに対して特別の好意を持ち、そのためにドイツを憎み、まきそえに日本もまきこんでしまった。ルーズベルトは、日独を無条件降伏に追い込むことばかりを考え、チャーチルも、ドイツへの増悪にかりたてられた。米・英は、日独民族の抹殺を強調することによって、聖戦の大義を失ってしまった」

「いや日・独も、真の敵（ソ共）を忘れて、米・英への憎悪にかりたてられた面は否定できません」

「戦争をこのように拡大しておきながら、ルーズベルトもチャーチルも、収拾への知恵が不足していました。ひとり確固たる見通しを持って対処したのは、スターリンであり、彼の狙いは、見事に成功しました」

米國を奮い起たせた真珠湾奇襲

たしかにマッカーサーの言う通りです。第二次大戦は、日独対米英という、資本主義相互間の戦争でした。大戦中ソ連は脇役に終始し、大戦後に賭けた気配が濃厚です。これから世界共産化を国是とするスターリン・毛沢東勢力の大進撃が開始されるのではないかと宿敵同士を戦わせて疲労させ、弱った所を侵略してごっそり分取るのは、政戦略の常道です。そこにスターリンの慧眼が光っており、それを見抜けなかったルーズベルトもチャーチルも凡庸といわねばなりません。マッカーサーは続けました。

「わが国でも、フーバー元大統領などは、ルーズベルトが中立法に背いてソ連を援助し、ドイツを刺戟し、しまいには日本を怒らせるような参戦政策には反対していました。それはまた大多数の国民の意志でもありました。当時のアメリカ人の8割までは、参戦に反対だったのです。しかし真珠湾の奇襲によって、燃えにくかったアメリカのボイラーに火をつけてしまった」

マッカーサーは、共和党系の人物であることを、東條は知っていました。そしてアメリカでは、共和党の方が、戦争に対して民主党のルーズベルトよりも遙かに深い読みをしていたことも感づいていました。しかし日本としては、目前の戦争に追われて、国際戦略への配慮にまで至らなかったのです。東條はマッカーサーの真珠湾奇襲の批判に対して、敗戦前後から考えていたことに触れました。

「私は開戦前、極力外交交渉によって局面を打開するよう陛下から指示せられ、日米交渉に真剣にとり組みました。もしあの時、これ以上南方に進出せず、南部仏印から撤退するので、石油禁輸を解いてほしいという乙案を、米側がのんでいたら、開戦にはならなかったでしょう。にもかかわらず、突然米側から出てきたのが、支那大陸のみならず、満州からも撤兵せよ、三国軍事同盟も破棄せよ、というハル・ノートでした。そこまで屈辱的条件をつきつけられたら、いかなる国でもたちあがっていたでしょう。そこに“自存自衛”

の最終的根拠があります」

「日米交渉の頃は、双方に不信感と思惑が渦巻いていました。あの時日本側が乙案をのんでも、開戦が先にのびるだけで、日本側が余計に不利な状況に追い込まれただけかも知れません」

「それではもし閣下が日本の司令官だったら、どういう作戦をとられますか」

「戦争が終わってからは、どんなことでも言えますが、私だったら、真珠湾奇襲という作戦は、とらなかったでしょう。あの奇襲は、ルーズベルトとチャーチルを喜ばせ、参戦の口実を与え、アメリカ国民を奮立たせてしまいました。それではどういう方策をとるか。今から考えて、開戦時の日本は、極東の大帝国であり、誠忠無比な陸海軍を持ち、アジア諸民族の輿望を担っていました。開戦時日本軍が進駐した時、アジア諸民族がいかに歓呼して迎えたことか。それだけ期待され、希望の星であった日本ですから、やり方さえよければ勝利に導くことができ、歴史の大転換をはかることができたのではないかと残念でなりません。

成功するかどうか、私が当時の日本の指導者として、夢を述べさせて貰うと、(ヒトラーもそうでしたが) アメリカを刺戟する政策は、控えます。そしてアメリカを相手とせず、大東亜の解放という旗だけを掲げます。当時チャーチルが最も恐れていたのは、日本が対米戦に踏みきらず、南方にだけ進出することでした。南方は英・蘭軍ともに弱体で、当時の日本の軍事力をもってすれば、生卵を割るようなものでした。したがって、数百年の植民地帝国である英蘭だけを相手にして進撃し、マレー沖海戦でイギリスの極東艦隊を苦もなく撃破し、東南アジア諸国を無条件で独立させます。さらにアフリカ東岸のマダガスカルに上陸を敢行します。(当時チャーチルはそれを警戒し、ヴィシー・フランス政府軍と戦い、マダガスカルを占領していた)。まずマダガスカルに独立を与え、そこでチャンドラ・ボーズあたりに演説させれば、独立の波はインドとアフリカに波及していたでありますよ。アジア、アフリカを次々に独立させて、日本が撤兵すれば、大東亜戦争は短期間で終り、アジア・アフリカ植民地解放戦争という大義が貫けていたはずですよ」

「なるほど、そうすればルーズベルトはアメリカ国民に参戦を説得する理由が乏しく、チャーチルの最も恐れている事態になったという訳ですか。それにこの作戦によれば日本の連合艦隊は無疵^{むきず}のままで残りますね。しかしあの段階で、アメリカ海軍という前門の狼を放置しておいて、日本の連合艦隊を後門の虎にむけるということは、余りにも冒険ではないか…」

「しかし後門の虎は、虎ではなく猫にすぎなかった。英国の極東艦隊を撃滅(マレー沖海戦)するには、百機少々の海軍航空隊で足りたし、マダガスカル占領は、連合艦隊を向けなくても、1つの艦隊で充分です。それにアメリカ人の国民性は根がフランクですから、アジア、アフリカが次々独立すれば、却って拍手さえますよ」

スケールの大きいマッカーサーの話に圧倒されながらも、東條はすぐには納得できないようでした。彼は話題を転じました。

アメリカに共和党路線が生かされていたら？

「大東亜戦争に関連して、もう1つ『もしも』に触れさせてください。もしも1932年、ルーズベルトとフーバーが争った大統領選挙でフーバーが勝っていたら、日米戦争は起らなかったのではありませんか」

「1932年は、ヒトラーが政権を獲得した年でもあります。その頃から共和党の路線が続いていたら、世界の歴史は、まったく違ったものになっていたでしょう。もともとルーズベルトは、ニューディールという国内政策で人気を博した人物でした。彼は一応の任務を果たしたのだから、二選で後退し、1940年の大統領選挙では、交代すべきであったのに、史上例を見ない三選まで果たしました。せめて40年の大統領選挙で、共和党のウィルキーが勝っていたら、フーバー路線が強く生かされていたはずです。

そうしたら独ソ戦においてアメリカはどちらも援助せず、双方の疲れを待って、仲裁に乗り出していたでしょう。アジアでは日本と蒋介石政府が争った支那事変に対しても、仲裁役を買って出たはずです」

「なるほど、貴国のモンロー主義というのは、相互に干渉せず、それぞれをあるべき姿に立ちかえらせるという一面の意味も、持っている訳ですね。やはり世界の安定した秩序というのは、ヨーロッパではドイツとイギリスが協調し、アジアでは日本と支那が共存すること、そしてアメリカとソ連は、自国の分を守って、他国に干渉しないこと、ということになりますね」

「世界を米・ソ二極に分割する第二次大戦後の体制は、自然な国際秩序とは言えず、永続きはしません」

大西洋宣言と大東亜宣言

「私はさきほど、わが国の戦争目的を理解せられた閣下の言葉を聞きながら思い起したことがあります。それはルーズベルト大統領とチャーチル首相が、昭和16年、即ち1941年8月14日、共同宣言を出されました。一般に大西洋宣言といわれ、他の連合諸国も参加しました。これが貴国の戦争目的を示したものと思われれます。この第三項に『すべての国民がその政体を選択する権利を尊重し、強奪された主権と自治が回復されるものと希望する』とありました。すべての国民に自治と政体を選ぶ権利を認めるという内容であります。即ち貴国もアジア・アフリカの諸国民に、独立と自主権を認めるという訳であります。これは実は、わが国が打ち出した『万邦をして各々その所を得しめる八紘一宇』の世界政策（大東亜宣言はもっと具体的）と、大して変りはありません。日・米は大差のない戦争目的を掲げてお互いに争ったことになります。この点を事前につきつめておけば、日米戦は起らなかったのではないかと…」

「よい点を衝かれました。しかし客観的に見た場合、アジア、アフリカを植民地化している国が、民族の自決権を認めるために戦うといっても説得力はありません。アジア解放をストレートに訴えた日本の戦争目的の方が、彼らの魂を動かしたと言えましょう」

「それでは第二次大戦を、自由民主主義対全体主義、デモクラシー対ファシヨの戦いというのでは…」

「私はそのような分類は具体性がないと思っていました。今度の戦争では米・英等連合
国側にソ連も加わっている。ソ連は『プロレタリア民主主義』を唱えてはいるが、中味は
独裁の国であり、その徹底ぶりは経済や社会生活にも及ぶ。ナチス以上の全体主義の国で
ある。そのソ連を自由と民主主義陣営に入れるのは間違っている。また日本をファシズム
の国というのもおかしい。日本と独・伊は、その成立過程が違う。ポツダム宣言にも、『民
主主義的傾向の復活強化』といている。もともと日本は、議会制民主主義の国であった。
ポツダム宣言はそれの復活強化を願っているのである。ドイツのように、1つの政党が政
権を獲得し、都合のよい憲法を作ったのとは違う。戦争が終れば、日本はもとの議会主義
運営に立ちかえる性質を持っている。たしかに日本はドイツと軍事同盟を結び、ドイツに
熱狂した一時期はあったが…」

両将^{ひるば}昼食共にして

緊張した会談が続いているうちに、やがて昼を迎えました。マッカーサーは昼食を用意
させるにあたって、水師營で乃木とステッセルは、どんな料理を食べたか、調べさせまし
た。しかしその時のメニューが判らず、結局簡素な日本料理と西洋料理を用意させました。
料理が配られると、まずマッカーサーが乾杯の音頭をとりました。

「大東亜戦争にあたって、祖国のために戦った忠勇武烈な日本軍将兵の偉業を讃え、無
数の戦死者の霊安らかれと祈りつつ——乾杯」

続いて東條が音頭をとりました。

「太平洋戦争において、フロンティア精神を發揮し、勇猛果敢に戦ったアメリカ軍将兵
の忠誠を讃え、あわせて戦死者の慰霊のために——乾杯」

続いて「トルーマン大統領閣下の健勝を祈って乾杯」

「天皇陛下の万歳を寿いで乾杯」

が続き、文字通り「昨日の敵は今日の友」の友情交歓の場となりました。

その時、乃木邸の家庭菜園に待機していた軍楽隊は演奏を再開しました。

メロディは会見場にまで聞こえてきました。

- 4、 昨日の敵は今日の友
語ることはもうちとけて
我はたたへつ、かの防備
彼はたたへつ、我が武勇

- 5、 かたち正して言い出でぬ
「此の方面の戦闘に
二子を失ひ給ひつる
閣下の心いかにぞ」と

- 6、 「二人の我が子それぞれに
死所を得たるを喜び
これぞ武門の面目」と
大将容力あり
- 7、 両将^{ひるげ}昼食共にして

なほも^{つき}尽せぬ物語

「我に愛する良馬あり
今日の記念に献ずべし」
- 8、 「厚意謝するに余りあり
軍のおきてに従ひて
他日我が手に受領せば
ながくいたはり養はん」

乃木将軍の長男勝典は南山の戦で戦死（26歳）し、次男保典は203高地の攻防戦で戦死（24歳）しました。ステッセルが、そのことについて悔みを述べると、「息子を国家に捧げたことは、武家として名誉なことであった」と、答えています。

東條にも、古賀秀正大尉という娘婿がありました。当時近衛師団参謀をしていた古賀は、陸軍省軍務局将校の説得を断り切れず、ポツダム宣言を拒否する文書に署名しました。これは結果として、「承諾必謹」を信条とした岳父東條の意志に背くこととなります。

古賀大尉は、決起に失敗し、責任をとって、8月15日朝、師団の貴賓室で割腹し、咽喉に拳銃を撃ち込んで自決（28歳）しました。東條は、娘婿が責任をとって自決したといっても、「大権干犯」を容認することはできませんでした。それを知っていたマッカーサーは、東條の娘婿の自決については、触れませんでした。

それに対して東條は、演奏を聞きながら、ステッセルが乃木にアラビア産の愛馬を献上したことを思い出しました。しかし彼は愛馬を持たず、マ元帥に馬という訳にもゆかず、伝家の宝刀を献ずることを思いつきました。敗れて悔いなき名将マッカーサーに対して、宝刀を贈っても惜しくはない気持ちがしました。彼は盃を置いて、マ元帥の方へ向きました。

「時に閣下、私の父英教は、日清戦争の時、大本営参謀として参加し、日露戦争の時には、姫路旅団長として参戦しました。唯今元帥から返して頂いたこの軍刀は、父の代から伝わる宝刀であります。今日の記念に献上したいと思いますので、お受けとり頂ければ幸いです」

マッカーサーは、東條が最も大切にしていた宝刀を贈ると言ったことに感激しました。それは自分を信頼してくれていることの何よりのあかしだと思ったのです。しかしすぐに乃木将軍の故事を想起しました。

「日本刀は武士の魂と聞いています。しかもそれは貴下の父の代から続いた宝物と聞けば、いっそう貰いにくい感があります。だからといって、好意を受けないことは、失礼にあたりましょう。私個人が貰ってもよいかどうか、一度軍規に照して検討し、貰ってよいということになったら、マッカーサー家の宝として、末永く保存させていただきます」

天皇と大統領の会見

時間は刻々に経過してゆきました。日・米の将軍同士は、盃をかわしながら、戦争の推移を語り、相互に防備と武勇を讃えあいました。日米相互に名残はつきず、やがて東條が起ちました。

「本日は敗軍の将を御招待頂き、英機一代の感動を覚えました。それは他の6名も皆同感であったと思います。会見の場所が旧乃木邸と聞きましたので、およそのことは想像しておりました。しかし閣下が戦争について敵味方の立場を包容され、相互を生かそうとされる哲人であられたことは、まったく予想を超えていました。最後に偉大なるアメリカの哲人に対して、私の悲願を一つだけ述べさせて頂きたいと思いますが、お許し頂けますか」

マッカーサーは首肯いて、くわえていたパイプを、灰皿の上に置き、東條の方へ目を移しました。

「実はわが国の天皇陛下も、実は哲人であります。昭和の年代に入って20年間、総理大臣は18回変わりましたが、陛下は変わることなく元首であられました。その間陛下は常に無欲無心であられ、君民一体、君民共治の立場を、貫いてこられました。日本の運命に対する感受力は、神のごときものがあり、すべてを見通しておられました。日本が今日の破滅に陥ることを、誰よりも早く、そして強く感知しておられたのは、実は陛下でありました。しかし陛下は常に民と共に歩むというお心が優先しておられ、私は陛下の補弼の任を完うし得なかった訳であります。まさに罪万死に値します。私としてここに閣下をお願いしたいことは、既に気づいておられると思いますが、いちど陛下とトルーマン大統領との会見を企画して頂けますまいか。

陛下は戦争中も、リンカーンとダーウィンの像を座右に置いておられ、終戦の詔勅の中では、万世の為に太平を開かむと述べておられます。大統領閣下も敵将である我々に対して、このような博愛の精神を示されました。ここに日・米の元首の会談が持たれますならば、必ずや世界平和の礎となることを確信するものであります」

マッカーサーは両三度深く首肯しながら、「会談場所はハワイ？ミッドウェー？」とひとりごとのようにつぶやき、尽力を約束しました。

七士の最後

マッカーサーとの会談を終えた7人の顔は、晴々としていました。彼らがマッカーサーの見送りを受けて門前で握手をかわしていると、またしても軍楽隊の演奏が始まりました。

9、 「さらば」と握手ねんごろに
別れてゆくや左右

つつおと
砲音絶へし砲台に

ひらめき立てり 日の御旗

7人が用意された車で帰ってゆくと、各新聞記者は、一人一人に取材すべく、後を追いかけてきました。しかし誰一人取材に応ずる者はおらず、帰宅すると門はかたくしめられました。個人の取材ができなかった記者団は、別にマ司令官に会見を申し込みました。マッカーサーは、記者団の強い要請に応じて発表することにしました。発表にあたって彼は、戦勝国のおごりがさめきらないアメリカ国民に、誤解を与えそうな部分と露骨なルーズベルト批判については一部削除のうえ、正確に副官に報告させました。

マッカーサーと東條英機の対談の様相が明らかになると、滅多に驚かない記者たちは、深い感動に襲われました。戦が終われば敵味方を超えて、国家相互の立場を理解しあう友情の発露は、これまでの戦争には見られなかったことです。「これは東洋思想と西洋思想の交流のクライマックスを示すものではないか」「世界平和の原形を示したもの」等の感想が、続いて出ました。翌朝の紙面には、それが反映されました。その見出しをいくつか紹介すると――

“両将、水師營の会見を再現” “昨日の敵は今日の友・相互に戦争目的を理解——真のヒューマニズムの顕現” “今に見る武士道精神の発露” “透徹せる哲人・マ元帥の識見（明治天皇と乃木将軍の蘇り）” “世界平和の礎示す世紀の会見”

朝刊が出まわっている時には、既に七士は、あたかも申しあわせたように、日本刀や拳銃で壮烈な最期を遂げていました。遺書はいずれも軍人らしく、

「一死大罪ヲ謝シ奉ル 神洲不滅 国体護持 七生報国 承詔必謹
天皇陛下万歳」

のような簡潔なものばかりでした。夕刊はいっせいに「壮絶七士の自決」と見出しをつけて、それぞれの最期を詳報しました。

マッカーサーは、昨日会ったばかりの7人が、揃って潔い最期を遂げたことを聞いて、（予想していたこととはいえ）衝撃を禁じ得ませんでした。「英傑の最期にふさわしい」、彼はそう感じいって天を仰ぎました。それと共に、「これで日本を憎悪していたアメリカの国内世論も、すこしはおさまるのではないか」という気持ちがよぎりました。やがて、「7人に対して約束したことは必ず守らねばならない」とつぶやいて、十字を切りました。